

公園の朝

長年の望をやつと踏み出す日が来た。

都市に於ける頻繁な交通機關。——それは多忙な都會人にとつて大きな文化の恩恵であつた。都會人と申してもそれは成人の事である、同じ都會生活をする私達の小さいお友達、幼児にとつて、この朝夕眼くるめくような激しい街路の往來、オートバイの爆音や、自働車の警笛、自轉車、馬車、ことに交通の繁い交又點を横切る時の緊張したまなざしを見る時、便利な都會の交通機關が子供には大きな恐れであり、おびやかしであるといふ事を切に感じる。

幼兒の生活を戶外へ。自然へ。といふ事は私の

み　ご　り

耳にひびく大きな聲であり、大切にされすぎて虚弱であつたり、貧血したりするお子さん方をおおづかりしてゐる現在の私としてのどうしてもさうすべき必要であり、又自分の幼い日に積わたる影でかくれんぼうをした思出から、おなじ年頃のこの、小さいお友達にも是非味はせたいねがひである。

ところが、都會生活者である故に一層切なこの希ひ、望み、計畫が、都會生活者である故に實行がむづかしい。一步戶外へ出、街路に立てば、むかうに、オートバイの煙とひびき、後に荷物自働車の獸のようなホーンに追はれる、この交通の恐

畏から、多数の幼児達を、どう安全に導かうか。戸外はよい。が實行方法？よむ方はお笑ひになるかもしれないが、私にとつてはこれが長い間のつきあたりであつた。社會生活全體の利益の爲、の便利な交通機關、それを幼児ばかりが反對に惠をうけるといふ事はないはず。私達は何とかして成人と同様幼児にもその惠をうけるようにしたいと希た計畫が叶て市營自働車の係りの人は私の小さいお友達の外に、わざ／＼一臺、ひきかへしの空の車を九丁目の停留場に其の朝用意して下さる事になつた。

學生時代の遠足の前の晩に、かつて味な經驗をそのまゝ、私は胸さわぎがして眠りつけないほどであつた。長い間の望がいよ／＼實現出来る、ほんとうに子供のよ／＼な喜びが、消しても消しても湧き上て來た。はじめての試み。

それだけ、もし此第一回到に失敗があつたら此實行は座折する。私の多勢の小さいお友達、小さなお室の中に昔ながらに、わや／＼と遊ばなければならぬ。手落があつては、成功しなくては、私の氣は張りつめてゐた。第一回の試であるから距離も短くして、市營自働車の一區間で行かれる處として場所を日比谷公園にした。試の前日、園の仕事が終つてから公園に行くと廣々とした草花に羊が群れてゐた。曇り日のうすい日ざしが時々そこに訪れる、ミレーの繪を思ひ出す。「都會の幼児はやつぱし幸だ」これはこれまで思つた事のない言葉だつた。兎は穴からのぞき、栗鼠は木の上をすべつてゐた。公園課の係りの方は、晝食のお湯まで沸して下さるし羊のある草地へも入れて下さるとの事にすべて感謝の外なく、あやふげな空だけを氣遣てあくる日を待つた。

一組の幼児に受持保母と衛生婦一人、小使一人

保母實習生三人。「行てまゐります」お留守番の小さいお友達や先生方に、ご挨拶をして園を出たのが午前九時。九丁目の停留場まで十五分ほど、そこで少し自働車の來るのをまつた。照らず降らすの程よい日和。

「あをい自働車、黒い自働車。どつちにのるの！」
「僕お母様と「堀の内」へ行く時、あゝいふのに乗た事ある」たのしいさざめきはやがて一臺の車の中へは入つた。

「小さい人おかけなさい、私お姉さんだからい、の」光ちやんのいつものお姉さんぶり。自働車は公園まで直通でした。左側の町では大掃除をしてゐます。「あ、大掃除、僕の家昨日した」

「君、競走だよ、あの電車、もうちき追ひ越すからつ、もうすこしく、ほうらね、かつた、あ、」
「いゝね自働車一番早いや」

「あお玉杓子がある」

秀ちやんは下の下に小さく澤山うろついてゐるお堀の家鴨を春の遠足の時に行つた、お池のお玉杓子を連想してゐる。

「君あれは鳥だよ、ほら飛ぶじあないか」
「さうだね」「あゝまたとんだ」

「先生、先生、あれ井戸掘るんでしよう、四谷見附のとこにもあつてよ」

「あの梯みたいの？」
「井戸から水が出るのね」

「さうお堀の水がなくならないようにするのよ」
「いいなあ、この自働車一番早い」

九丁目から十五分で日比谷へ着きました。自働車の小父さんは、小さい人達が、無事に公園には入るまで、いろいろ親切に世話をして下さつた。そして歸りの車は、交番へたのんで十二時半に公園の入口に横づけといふお約束をして別れた。

まづ、皆で事務所のおぢさんの處へ「今日は」

と御挨拶に行く。丁度子供の國の繪にあるような可愛い、西洋館の事務所の階段の、そこにもこゝにも、うす色の大きな、あふむ、がゐて、「お父ちゃん」「今日は」と語つてゐた。

花壇には、サルビアが目さめるような緋の色に、ダリア、コスモス、の眞盛り、静かな朝の空をうつした水面には、睡蓮の花がゆめのような色にういてゐる。

「おゝきれい、お花がまつさかりね」

「お花見のようだ」ベンチをさして良子さんが、「ここに腰かけませうよ先生」「おや、もうおくたびれ?」「さうぢあないのよ、こゝにかけてお花見ませうよ」

きれいに掃き清められた公園の朝の静かさ!!

芝生には雀が群れて、ちゝとなく。幼さい人達の足は、樂の音がなくともスキップにおどつて行く。

舊音樂堂の跡の、たくさんベンチの並んだ處で一休み、キャラメルのの小さい箱を各自ポケットに入れて又木蔭の道に行く。

「おゝ、いゝ香!!」鼻から、いきをしますと、あまい香が。

「もくせい、でせよ、先生つ」

「あ、こんな可愛いのがおちてゐた、」

「先生つ、上にもある、あそこに、あそこに、」金木犀の花は盛を少しすぎて、地にもこぼれ、枝にも香てゐる。

「もくせい、僕のおうちにも、もうせんあつたのよ」

「もくせい、もくせい」はちめてきいたのか秀才やんは口の中でかう言ひながら、こぼれた花を捨てゐる。

「さあ、みんな、一所に向側に行きませう。こゝは公園の中の自働車の通る道だから、みんなで、

かたまつて、一緒に通りませう。」

廣い道を横ぎつて、小砂利のしきつめた小途に出ました。左はひろくとした草地、右はテニスコート。鳩小屋、くじやく、野兔のお家。

「あつ、羊！羊！先生、羊紙たべる？」

もう清さんはボケツトの紙を出して小走りに行く。今日は草地を小さいお友達にゆづつた羊のむねは、ピンクや藤色の紙のおみやげを、おいしうにいただいてゐる。活動好きの茂さん達は早くも児童遊園の門をくぐつて、小さい、こんま、ほどのシーソーに近よる。公園には親切な、小母さんが居られて、いろくこまかい世話をし、あぶなくないように導いて下さる。ブランコ、お滑り木昇りの木は、さすがに大きいので誰も試みようとしなかつた。お手を洗て、ひろい草地でお辨當をひらく。赤とんぼやあぶにもキャンデーをお福分けする壽郎さん。「今日はお日様が出ないね」曇

た空をあふいで幸ちやんが云ふ。ほんとうにこれで秋晴れだつたら………。それは引牽者の胸にもかなり恨であつた。

あそびたらない皆をうながして公園の小母さんや小父さんにお別れたのは豫定の十二時すこし過ぎ。自働車は約束通り来て居た。親切なその小父さんは九丁目をもう少し先へ行た危険のない處まで小さい人達を運んでくれた。

「小父さん、さよなら」「おちさん。ありがたう」子供達は教へられずとも心からこの言葉を叫びました。すべては成功であつた。K先生、H先生もこの初の舉を案じて迎に來て下さつた。

俊夫さんの指先の傷は其の日の小さい失敗であつたけれど翌日の元氣な登園によつて引牽者の心は和いだ。

「また、つれてつてね、自働車で」翌日小さい人達は、かはりくにかういふおねだりをした。

「さうね、又行きましようね、自働車の小父さんにたのんで」翌日の自由畫に、昨日の事を畫かなかつたのは風邪で休んだ明さんだけであつた。

よりよい、二回目の試を計畫しながら。

——十月二十四日記す——

觀察の地方色

——廣く御寄稿を乞ふ——

風あたゝかい南の國から、木枯吹き荒ぶ關東地方を経て、雪に埋れる北海、樺太の果てに到るまで、季節風土の變化の多い我國には、土地々々による觀察の地方色に面白い違ひもあることと思ひます。此の興味ある問題について皆様の御寄稿を頂き誌上を賑はせていただき度いと存じます。貴園でのありのままの實際のが結構で御座います。べ切りは十一月の三十日までとして、どうぞ振つて御寄稿下さい。

(東京市本郷區、女高師附屬幼稚園内『幼兒の教育編輯係宛てに御願いたします。)